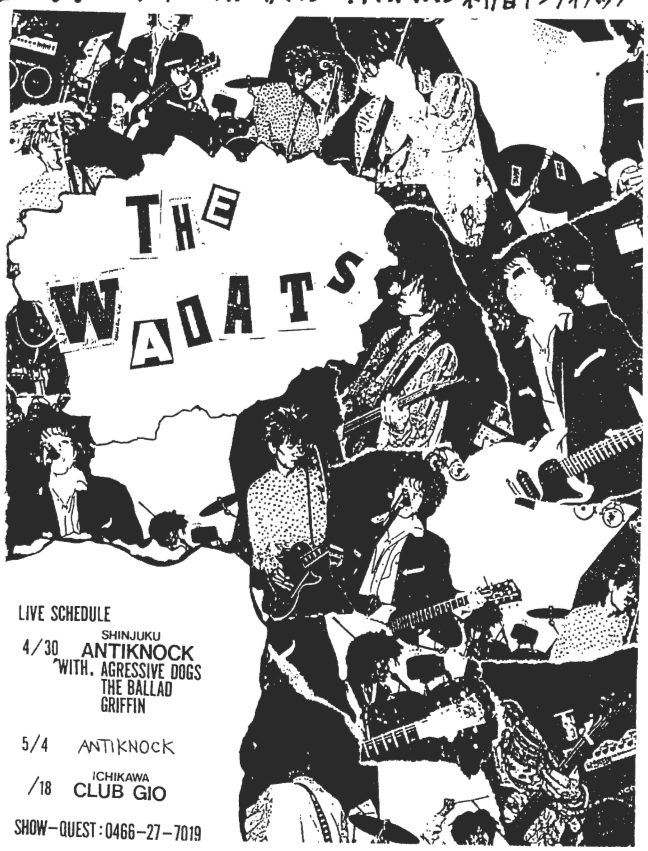
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

30号 1991.4.27
文・編集・発行
恋怪子

LIVE: THE WAIATS 1991.4.13 新宿アンティノック



THE FOOLSのNEW ALBUM「NO MORE WAR」FOOLS NOW 1991/5/25発売。¥2,500 「史上最強の問題作」これさえあれば、ストーンズもドラップもいらない」というふれこみスゴイぞ。THE FOOLSのライブが5/6渋谷クロコダイル

MORE THE WIATS: 4/13のライブでやった曲の中で、2曲目の「I WANNA TELL YOU」、4曲目の「SHOT GUN BOY」と5曲目（題名不明）が!!!「SHOT GUN BOY」で「あふれているものなんか大人たちのわずか、金をネタになぐさめあうのさ」というところがあってハッとさせられた。ものがあふれてるって、よく考えもしないでいたから。

いいライブって、たいてい時間が止まっているって感じるし、おわったあとで長い時間がたったように感じる。たとえ演奏時間は短かくても。だけどこの日、THE WAIATSをきいていて感じたのは、時間がものすごい速さで過ぎていっているということだった。ものすごい速さ。歌と演奏に時間がどんどんひきよせられていく…。ステージの上にいるTHE WAIATSの4人はいまの瞬間は若くて、生きているんだけど、明日は骸骨になって荒涼としたところに横たわっている。それが見えた。死、という抽象的なものを感じたんじゃなくて、骸骨が見えたのだ。どうしてなんだろう？ みごとなロックンロールで、ワイルドで、パワフルで、パンクで、ロマンチックなのに…。どうして生きる熱みたいなものを感じないんだろう？ この「どうして？」がものすごく私をTHE WAIATSにひきつける。荒涼としたところに横たわっている骸骨が見えて「どうして？」をくり返していたら、最後の歌がそういう荒涼としたところを思わせるものなんだもの射ぬかれちゃったよ。

この日録音したテープを何回もきいて（他のものなんにもききたくないくらいひきこまれているので）気がついたことがある。テープをきいてTHE WAIATSの4人の中の誰かにひきつけられるんじゃなくて、THE WAIATSというバンドにひきつけられ、心がズキズキするのだ。ライブのときは、たしかにヴォーカルの人にいちばん目がいっていたけれど、それはヴォーカルの人だけが目立っていたからってことじゃなかった。きっとヴォーカルからTHE WAIATSがいちばんきき取りやすかったのだろう。ライブのときは、テープをきいてそういうことがわかった。4年前、THE BLUE HEARTSのライブにはじめていったときもこんなふうに感じた。あの4人が4人でいるすごさ、カッコよさ。多分、あのとき以来のことだ。

LIVE: ティラノザウルス 1991.4.15 渋谷ラ・ママ

心臓のあたりに、溶けてドロッとなった、まだ冷たさの残っている保冷剤をおしつけられているようだった。氷でもなく、ドライアイスでもなく、溶けてドロッとなった保冷剤。はじめからずーっと。おわりまで。一瞬「まるで恋に心うばわれたように」ではじまる歌と「舌を出せ」の途中までは、それが心臓からはずれたけど…。

私はティラノザウルスにおいてきぼりをくらったらしい。あの人たちがどこかへ行ったとすればね。でも、どこかへ行ったとしても、それは私の行けないところか、行きたくないところ。溶けてドロッとなった青い色の保冷剤のようなところ。私はおいてきぼりをくらって、ベソをかいてた。

4/13のTHE WAIATSが!!!で4/5のティラノザウルスが下記のとりなので、私の心はいま大きくゆれているのデス。

LIVE: THE FOOLS 1991.4.13 新宿アンティノック

1時間以上のライブで、はじめの方は体も躍るし、歌にもひきこまれたけど4曲目くらいにやった「マネー」では身動きができなくなるほどお鬼がむき出しにされた。「マネー」のあとにやった、ラップみたいな「戦争反対」の歌をきいていて、あ、このヴォーカルの人は、ブルースに生活している人なんだと思った。そう思ったら、この人の歌っているのは、スタイルとしてはブルースなんだと気がついた。「マネー」までは、そういうジャンル分けをしようという気が全くおこらないくらいにひきこまれていたのだろう。それが「戦争反対」の歌をきいているうちに客観的にステージを見るようになって、ヴォーカルの人はブルースに生活している人で、この人の歌う歌は全部この人の人生観、世界観で、それには私が同感しないものもあるんだって思った。この人が歌うということは、全部この人の生き方で、それには私が共感しないところもあるんだ。だけど同感、共感するところの強烈さは、なんという強烈さだろう。

「戦争反対」のあと、おわりの方では、なんか神がかりのように感じられてきた。「神さまなんかに用はない」みたいなことを歌っていたけど、本人が神のようになって、きく方と対等じゃなくなってきた。すごく強くて、大きくて、パワーに満ちているんだけど、歌が説教みたいにきこえてきて、おわったときにはくたびれていた。

LIVE: ドリンカーズ 1991.4.13 新宿JAM

よかった。はじめの3曲くらいはカバーのようだったけど私にはジミ・ヘンドリックスの「FOXY LADY」しかわからなかった。「ナイフ」という曲。歌詞がシンプルでパワーがあった。最後から2曲目のギターは、なんかジャズ・ギターを思わせた。なによりドリンカーズは独特であるところがいちばん。

LIVE: THE BLUE HEARTS 1991.4.12 宇都宮文化会館

はじまって1時間くらいで「トレイン・トレイン」をやっている途中で、あとはパス！で会場を出た。ステージの上のヒロトがただのアンチャンで、あれじゃあ、きいている私の方が生きているって感じになっちゃう。「青空」でマーシーがちょっとよかったかなぁってくらい。「真夜中のテレフォン」「ナビゲーター」のときは会場中が大合唱でうんざり。

WORDS: ジャニス・ジョプリン

デヴィット・ドルトンのインタビューに答えて。（ジャニス ブルースにふむ より）

——いい演奏ってのは一方ではとても真に迫っているのに、一方ではしっかりとした構造をもってるんだ。不思議ですよね。

そうなんだよ。ちゃんと構造がある。だって思い出すんだけど、ビッグ・ブラザーとやってた時、時々、あんまり興奮して、うたうのを止めちゃって、とび上ったりしたもんだ。でも、そんなことは、もうやらないんだ。だって、あるところ、そこんところに来たって分ったら、そのときこそ、頑張ってうたわなくちゃだめだよ。ぜったい。音楽をやるってのは、音楽をただ放り出しておきゃいいってんじゃない。それじゃウンコしてるみたいだもん。ウンコはたしかに出すけどさ。演奏するってことは、ひとつの感情をとりあげて、それをきいている人が、読みとれて、理解できる、完成された、無駄のないなにかに変えることなんだ。自分のためだけうたってるんじゃないんだ。自分がどう感じてるかってことだけじゃたりない。自分の感じてることをつかんだら、次はあんたのボーカル・コード、あんたの楽器編成、あんたのアレンジをしてやって、聴衆が高められた感情をうみ出せるようにしなけりゃならないんだよ。